

新発見！伏見城城下町「正宗」の武家屋敷

(財)京都市埋蔵文化財研究所 モンペティ恭代

はじめに

京都市伏見区桃山町正宗において発掘調査を平成 24 年（2012）に行いました。当地は周知の遺跡である伏見城にあたり、絵図や地名・文献史料などから、伊達政宗の伏見上屋敷とその北に築かれた伏見城惣構えの土塁があった場所と推定されます。

調査期間は 2012 年 11 月 12 日から 12 月 15 日の 1 ケ月間で、調査区を斜面地と平坦地の 2 地区に設定して行いました。調査面積は合計 282 m²でした。

伏見城の歴史

伏見城は、天下人となった豊臣秀吉が文禄元年（1592）、指月の丘（現在の観月橋団地一帯）に隠居屋敷を造営したことから始まり、江戸時代初めの元和 9 年（1623）に廃城となります。安土桃山時代から江戸時代へと大きな時代の変化と共に歩んだ伏見城の 31 年。ここでは 4 期に分けて考えていきます。

第 1 期（豊臣期指月屋敷）1592 ～ 1594 年

関白の座を秀次に譲った秀吉が「指月の丘」に隠居屋敷を築きました。隠居所として構想されたため、規模はあまり大きくなかったとされます。

第 2 期（豊臣期指月城）1594 ～ 1596 年

淀殿が秀頼を産んだため、これまでの構想を修正し、屋敷を大きく拡張して城とします。文禄 4 年（1595）、秀次を自殺に追い込み、聚楽第を破却、その建物の多くを伏見城に移築します。文禄 5 年（1596）には文禄の役を終結させるために明からの使者が来日することになり、これを迎えるため、豪華絢爛な城郭へと改修します。ところがこの城は、使者を迎える寸前に大地震により倒壊してしまいます。

第 3 期（豊臣期木幡山城）1596 ～ 1600 年

秀吉は大地震の翌日から指月の丘北側の木幡山に大規模な城郭の再建を開始します。この城は翌慶長 2 年（1597）には完成します。この城の本丸・天守閣は現在の明治天皇伏見桃山陵の北側あたりになります。秀吉はこの城で慶長 3 年（1598）に亡くなります。秀吉没後は、伏見城は実質的に徳川家康の支配下におかれます。慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いの前哨戦では石田三成率いる西軍の猛攻を受け、ほとんどの建物が焼失してしまいます。

第 4 期（徳川期木幡山城）1600 ～ 1623 年

戦の後、ただちに家康は伏見城を再建し、慶長 8 年（1603）、ここで征夷大將軍の宣下を受けています。慶長 10 年（1605）3 月に朝鮮使節と会見し、文禄・慶長の役で関係が悪くなっていた朝鮮と和議を成立させました。同年 4 月、秀忠が將軍の宣下を受けたのもこの城でした。そして元和元年（1615）、大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡。しばらくは二条城が儀典用、伏見城が居館用として利用されていましたが、一国一城令の主旨から、伏見城の廃城が決まりました。元和 9 年（1623）、家光の三代將軍宣下を最後の行事として廃城となります。伏見城天守閣の廃材は二条城や福山城・淀城に移築されたということです。

その後、伏見の町は城郭と大名屋敷はなくなってしまうものの町人住居域は維持され、京都と大坂を結ぶ交通運輸の拠点として幕府の直轄地となります。江戸時代を通じ、商業都市として発展を果たしました。城のあった木幡山には桃の木が多数植えられたため、桃山と呼ばれるようになりました。現代、私たちが見る伏見桃山城は昭和 39 年（1964）に建てられた鉄筋コンクリート造であり、その位置も本来の天守閣の位置から、かなりずれた場所にあります。

表 1 伏見城の歴史

期	仮称	年	場所	できごと
第 1 期	豊臣期指月屋敷	1592 ～ 1594	指月の丘	隠居屋敷として構想、城郭風邸宅。秀頼誕生。
第 2 期	豊臣期指月城	1594 ～ 1596	同上	構想を修正、大改造。秀次自刃。聚楽第破却。指月城、大地震で全壊。
第 3 期	豊臣期木幡山城	1596 ～ 1600	木幡山	秀吉最晩年過ごす。秀吉没後、家康入城。関ヶ原の前哨戦で焼失。
第 4 期	徳川期木幡山城	1600 ～ 1623	同上	家康、將軍宣下。大坂の陣で秀忠の陣。秀忠、家光、將軍宣下。廃城。

表2 周辺の調査一覧表

No.	所在地	調査方法	調査年月日	検出遺構	出土遺物	文献
1	深草中ノ島町17	発掘	2006.10.10～11.11	伏見城期の堀状遺構・土取り穴・土坑・石列など。	伏見城期の土師器・施釉陶器・瓦類。	『伏見城跡発掘調査報告書-京都市伏見区深草中ノ島町の調査-』2007
2	深草内膳町10-1	試掘	1995.10.23, 11.10～11	伏見城期の南北溝・南北石列など。	伏見城期の土師器、施釉陶器、巴文軒丸瓦など。	『京都市内遺跡試掘調査概報平成7年度』1996
3	深草大亀谷・六鉢町・万帖敷町	試掘	2001.9.28～11.26	桃山時代から江戸時代の町屋跡・地山を削り出した段。	桃山時代から江戸時代の土師器、陶磁器、瓦類など。	『平成13年度京都市埋蔵文化財調査概要』2004
4	深草大亀谷・六鉢町・万帖敷町	発掘	2002.5.8～7.30	江戸時代前期の路面・建物・礎石・水溜・土坑、後期の路面・建物・礎石・溝・水溜・土坑など。	江戸時代の土師器・施釉陶器・焼締陶器・瓦器など。	『伏見城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-11』2002
5	桃山最上町37-1他	試掘	1992.11.30	桃山時代の土坑。	桃山時代の土師器・施釉陶器など。	『京都市内遺跡試掘調査概報平成4年度』1993
6	桃山水野左近東町19	試掘	2004.11.1～5	桃山時代とみられる整地土層。	桃山時代の瓦類、江戸時代の陶磁器。	『平成16年度財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』2006
7	桃山水野左近東町19	立会	1982.2.1	表土下-0.1～0.4mで伏見城期の遺構面。	桃山時代の瓦類。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報昭和56年度』1982
8	桃山水野左近東町69	発掘	1977.4.13～6.6	桃山時代から江戸時代の土坑・井戸・溝など。	土師器・施釉陶器・金属製品・瓦類(焼変を受けた瓦・金箔瓦・水野氏の「沢瀉文」や黒田氏の「餅文」を紋様にした軒丸瓦など)。	『伏見城跡発掘調査概報(水野左近東町)-大名屋敷推定地区-』1977
9	桃山町永井久太郎他地内市道上板橋通	発掘	1998.7.6～1999.3.19	桃山時代から江戸時代の東西石垣・石組溝・南北石組・犬走り・路面・溝など。	古墳時代の埴輪・須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器・陶器・銭貨・石仏・瓦類(金箔瓦・「笹文」を紋様にした軒平瓦など)。	『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』2000
10	桃山町永井久太郎56	発掘	1986.12.1～1987.1.16	桃山時代から江戸時代の礎石建物・井戸・溝・柱穴・土坑など。	古墳時代の埴輪・須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器・陶器・瓦類・鉄製品。	『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』1989
11	桃山町永井久太郎	発掘	1978.10.5～12.5	古墳の墳丘、伏見城期の井戸・瓦溜、江戸時代の礎石建物・墓壇など。	古墳時代の土師器・須恵器・埴輪、伏見城期の金箔瓦、江戸時代の土師器・銭貨・骨片など。	『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011
12	桃山水野左近西町～井伊掃部東町他	立会	1983.5.30～7.26	桃山時代の東西溝・東西石組溝。	桃山時代の瓦類。	『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』1985
13	桃山町永井久太郎59-2	試掘発掘	1988.11.21～12.10	桃山時代の南北石組溝・築地・犬走り・路面・礎石建物など。	桃山時代の土師器・陶器・炭化した米・鉄製品・弾丸など。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和63年度』1989 『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』1993
14	桃山福島大夫西町1-2	発掘	2007.9.25～11.28	桃山時代の石組側溝・石垣基礎・礎石土坑・柵列など。	桃山時代の土師器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶器・銭貨・瓦類(佐竹氏の「扇に月丸文」を紋様にした軒丸瓦など)。	『伏見城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-10』2008
15	桃山町大蔵地内	試掘	2004.5.6～7.13	桃山時代の土坑・堀・落込・柱穴など。	桃山時代の土師器、陶器、瓦類。	『平成16年度財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』2006

伏見城城下町と惣構え

伏見城城下町は、桃山丘陵西麓を中心に町割りが行われ、堀と土塁からなる惣構えで囲まれました。惣構えは第2期伏見城期には完成していたとされます。あわせて、伏見港の整備や宇治川・巨椋池の改修も行われました。城下町には武家屋敷が多数造営され、有力大名の屋敷は城郭周辺に集められました。町人の居住区は京町通、両替町通を中心に配置され、その西側には寺社が配置されました。伏見城と城下町に関しては、近世に入って多くの絵画史料(絵図)が描かれています。現代の地図と絵図を重ね合わせると、今回の調査地は「仙臺中納言正宗」または「伊達越前守」などの名が記された場所にあたります。現地名(桃山町正宗)からも測り知れることですが、調査地は伊達政宗の伏見上屋敷が想定される場所です。

調査地周辺では、現代でも惣構えの土塁と堀の段を地形として確認することができます。山田邦和同志社女子大学教授は、現代の地図上に土塁と堀を重ね合わせた図を作成しています。^(*1) 復元図によると、調査地1区に現認できる斜面は、基底部の幅が約18mある土塁の南斜面にあたります。

*1 山田邦和 「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都』 日本史研究会 2001年

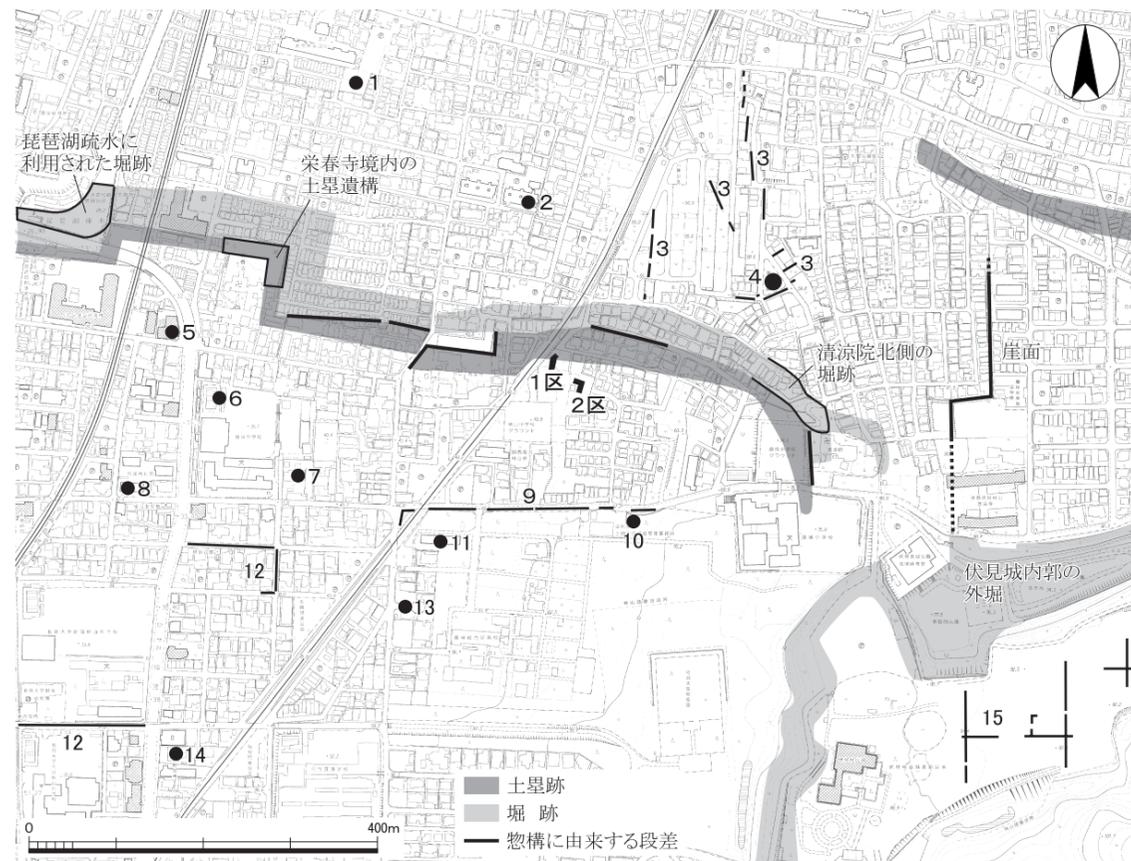


図1 周辺の調査地点および伏見城惣構えの遺構 (1 : 8,000)

周辺の調査

調査地周辺での主な発掘調査の成果には、No.4地点で江戸時代の路面や町屋などを検出、No.9地点で伊達街道の交差点から東へ延びる桃山時代から江戸時代の路面・側溝・犬走り・石垣などを検出、金箔瓦などが出土しました。No.13地点では伊達街道の桃山時代の路面・側溝・犬走りと武家屋敷などを検出、土器類の他、鉄製品や弾丸、炭化したおにぎり状の炊米などが出土しました。

伊達政宗と伏見城

伊達政宗と伏見城との関連を年表にまとめました。秀吉と初めて会ったのは、小田原攻めの時、24歳でした。秀吉は54歳でした。その若さと実力ゆえ、何度も窮地にたたさるのですが、非常に巧妙に切り抜けています。これを見てみると、いかに伊達政宗が時の権力者と上手に渡りあっていたか、よくわかると思います。



図2 秀吉・家康・政宗（イメージ）

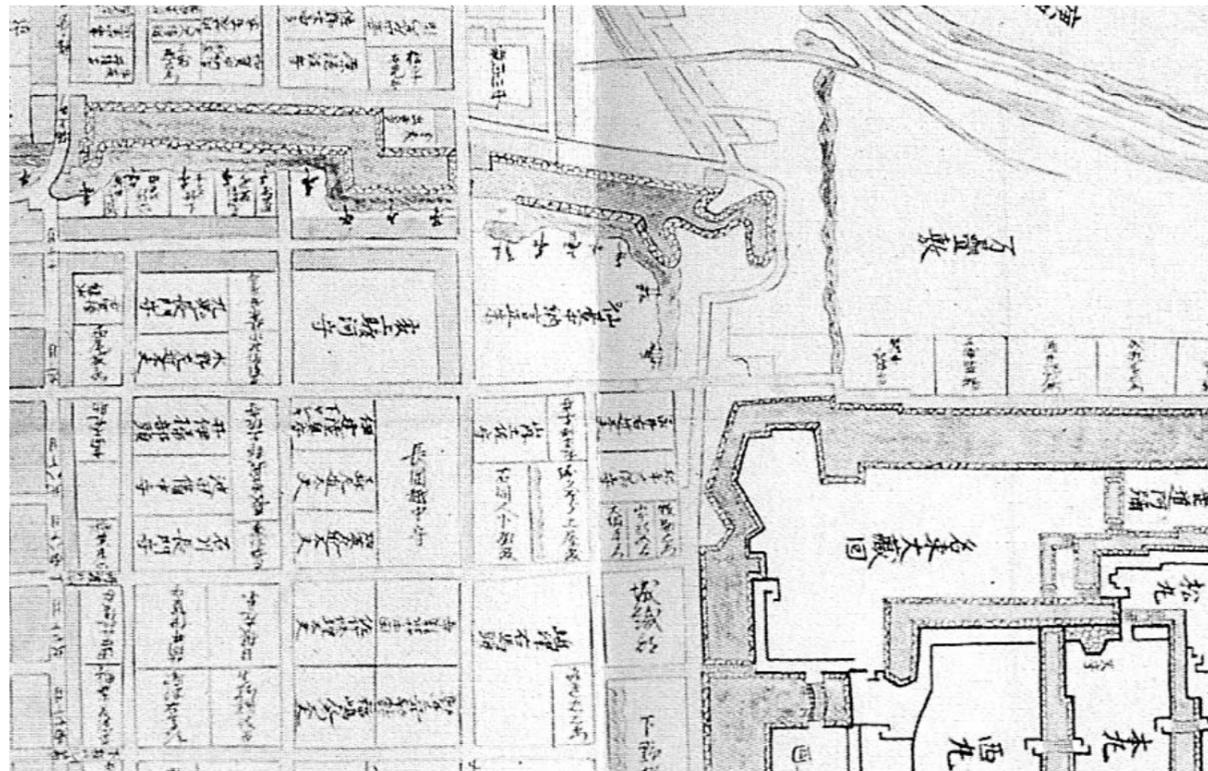


図3 伏見御城郭并屋敷取之絵図（伏見桃山城所蔵）

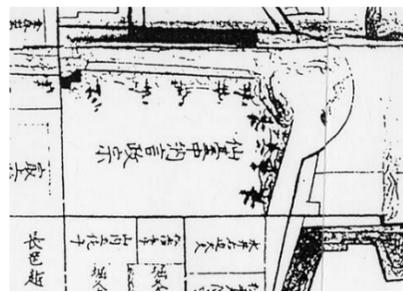


図4 伏水桃山御殿御城之圖（大阪府立図書館蔵）

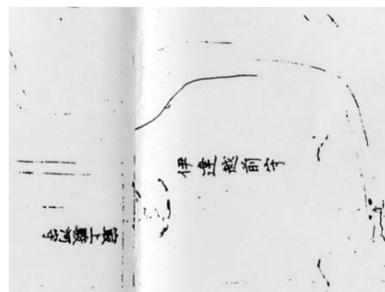


図5 伏見往古圖（大阪府立図書館蔵）

表3 関連年表

和暦	西暦	豊臣／徳川	伊達正宗
天正18	1590	1月20日豊臣秀吉(54歳)、小田原参陣を命ず。7月5日小田原城落城。8月9日秀吉、黒川城に入り奥羽仕置を命じる。9月23日秀吉、聚楽第で茶会を催す。11月7日秀吉、聚楽第にて朝鮮使節と会見、国書を受ける。	6月5日政宗(24歳)、小田原攻めに遅参。同9日秀吉に初めて謁する。7月28日宇都宮において秀吉に謁する。奥羽仕置により、妻子の京都在住が命じられる。
天正19	1591	1月秀吉、御土居を築き始め、5月おおよそ完成。2月千利休自刃。8月鶴松没。12月27日、秀吉、関白職を甥豊臣秀次(23歳)に譲り、太閤となる。この年、寺町の造営が進む。	閏1月27日、清洲において、秀吉に謁する。2月4日、京都に入る。同12日侍従に任ぜられ羽柴姓賜る。7月奥州一揆を鎮圧。9月岩出山城へ移る。長男秀宗誕生。
天正20 文禄元	1592	3月秀吉、唐津の名護屋城に出陣する。8月秀吉、伏見指月に新城の造営を始める。〈第1期伏見城〉	2月13日京都の聚楽屋敷に着く。3月17日京都を発ち、名護屋へ出陣、派手な軍装で目を引く。4月名護屋へ着陣。
文禄2	1593	9月大仏殿上棟。閏9月秀吉、伏見の新屋敷に移る。8月秀頼誕生。	4月朝鮮へ渡り、晋州城攻撃などに参加し、これを落とす。9月帰国、同月聚楽第の屋敷へ入る。
文禄3	1594	1月伏見新屋敷を城郭へと改修。〈第2期伏見城〉2月秀吉、吉野花見。3月伏見指月城の普請着工、淀城(納所城)を解体し、伏見に移す。8月伏見指月城完成し、秀吉、これに移る。この年、太閤堤の築造が進む。	2月秀吉の吉野花見に随行し歌会の席に列席する。6月16日聚楽第にて長女五郎八姫誕生。
文禄4	1595	7月15日秀次、自刃(27歳)。7月28日秀吉、聚楽第の破却を命じる。	4月京都を発つ。7月15日岩出山に帰着。8月上旬、大坂に着く。秀次の件で秀吉に詰問される。8月24日秀吉に許される。伏見城に屋敷地を与えられる。
文禄5 慶長元	1596	閏7月13日大地震により伏見城など倒壊。閏7月14日木幡山に伏見城の再建を始める。〈第3期伏見城〉10月本丸完成。	この年、伏見城修築の課役をつとめる。
慶長2	1597	1月20日伏見城増築開始。5月4日伏見城天守閣完成、秀吉・秀頼これに移る。	朝鮮出兵を免れる。冬、右近衛権少将に任じられる。
慶長3	1598	3月15日秀吉、醍醐の花見。8月18日秀吉、伏見城で没する(62歳)。	秀吉の遺品として鍋藤四郎の脇差を受ける。
慶長4	1599	閏3月13日徳川家康(56歳)、伏見城に移る。	正月五郎八姫と家康の六男松平忠輝の婚約が成立。
慶長5	1600	5月3日家康、上杉景勝の討伐を令する。8月1日西軍の攻撃により伏見城落城、焼失。9月15日家康、石田三成らの軍を関ヶ原に破る。	6月14日景勝を討つため大坂を発つ。7月25日景勝の白石城を落とす。9月下旬最上氏に援軍を出し、直江兼続の軍と戦わせる。12月24日仙台城の造営に着手。
慶長6	1601	3月15日伏見城再建が進み、家康、大坂より移る。〈第4期伏見城〉	4月14日仙台城に移る。9月10日仙台を発ち、同30日伏見に着く。10月近江に5千石の地を安堵され、江戸屋敷と久喜の鷹場を与えられる。
慶長7	1602	5月家康、二条城の造営に着手。	10月上旬伏見を発ち、江戸に向かう。
慶長8	1603	2月12日家康、伏見城において征夷大將軍の宣下を受ける。3月21日家康、新造の二条城に入る。	正月正室と五郎八姫、嗣子虎菊丸(忠宗)、伏見より江戸へ移る。8月、江戸を発ち仙台に着く。
慶長9	1604	8月14日秀吉七回忌、豊国神社臨時祭礼。	10月仙台より江戸に着く。
慶長10	1605	3月5日家康、伏見城で朝鮮使節と会見、和議を成立する。4月16日徳川秀忠(26歳)、伏見城にて將軍宣下を受ける。12月26日伏見城下に火災、大名屋敷などが多数焼亡。	2月16日秀忠の上洛の先駆として江戸を発つ。3月23日伏見に着く。4月26日秀忠に従って参内。5月29日京都を発つ。江戸を経て仙台に着く。
慶長11	1606	3月江戸城増築工事始まり、9月完成、秀忠、ここに移る。	12月24日五郎八姫、忠輝と結婚。
慶長12	1607	3月、畿内近国の大名に命じ伏見城の財宝や器物を駿府城に移送。閏4月江戸城天守台・石垣の修築を命じる。7月家康、駿府城に移る。9月江戸城天守台・大手門が完成。	閏4月江戸城堀普請を課される。
慶長13	1608		正月松平姓を許され、陸奥守に任じられる。
慶長15	1610	8月秀吉十三回忌、豊国神社臨時祭礼。	
慶長16	1611	3月豊臣秀頼(18歳)、二条城で家康と会見する。	4月虎菊丸と秀忠の養女振姫の婚約が成立。
慶長18	1613		9月15日支倉常長ら、月ノ浦を出帆。
慶長19	1614	10月1日家康、大坂討伐を発令(大坂冬の陣)。11月15日家康、二条から出陣、同日秀忠も伏見城から出陣。12月20日大坂冬の陣、和睦。	10月10日仙台を発ち、江戸を経て11月10日京都に入る。11月29日仙波に布陣し、大坂城を攻める。12月28日長子秀宗宇和島10万石の大名となる。
慶長20 元和元	1615	3月家康、駿府で政宗に謁見。4月、家康、再び大坂討伐を発令(大坂夏の陣)。5月5日家康・秀忠、大坂へ出陣。5月8日大坂城落城、豊臣氏滅亡。	正月23日、大坂城垣堀の普請を終え、京都に入る。3月、京都を発ち、駿府を経て江戸に着く。4月9日江戸を発ち、同21日京都に入る。4月28日京都から出陣。5月6-7日大坂方と合戦。7月23日京都を発ち、江戸を経て仙台帰着。
元和2	1616	4月家康、駿府で没す(75歳)。	2月、駿府の家康を見舞う。
元和3	1617	7月7日秀忠、伏見城で諸大名・公家を饗応。8月13日ポルトガル人、伏見城で秀忠に謁見。	6月6日將軍家忠上洛の共奉として、京都に着く。9月京都を発つ。江戸を経て、12月仙台へ帰着。12月13日、忠宗、振姫と結婚。
元和5	1619	2月伏見町人の本格的な大坂移住始まる。	4月26日將軍秀忠上洛の先駆として江戸を発つ。5月16日京都に着く。9月28日京都を発ち、江戸に着く。
元和9	1623	7月27日徳川家光(19歳)、伏見城にて將軍宣下を受ける。閏8月20日幕府、伏見城天守閣の廢材による新淀城造営を命じる。	5月16日秀忠・家光上洛の先駆として江戸を発つ。6月8日京都に着く。9月3日京都を発ち、江戸に着く。

今回の調査の成果

1区の遺構

1区では、東側（山側）でひな壇造成された整地層と土塁（惣構え）の南斜面、井戸などを検出しました。

土塁 15 この土塁は、中央部から一定の単位で順次斜めに盛土を行って構築しており、裾部では版築工法で土手を造って土留めとしている状況が認められました。また、整地層による段差斜面は土塁構築土の下層となっており、土塁の基礎地業は土塁裾部から段差斜面下層まで一連に施されていることがわかりました。これは、屋敷内のひな壇造成・土塁が同時に構築されている様子を示しています。また、土塁の裾部で東西1.5mの範囲に平瓦を縦にし、少なくとも10枚以上を東西横一列に並べた状態で検出しました。一部は2段に積んでいました。転がり落ちた状況の平瓦も6枚あり、合計27枚の平瓦を検出しました。法面表土の崩落防止か、何らかの目印として土塁の構築時に意図的に並べられたものでしょう。

井戸 2 直径1.9mの素掘りの井戸を検出しています。検出面から深さ2m以上掘り下げましたが、底面に達することはできず、安全対策上、掘り下げを止めました。この井戸から多量の瓦が出土しました。

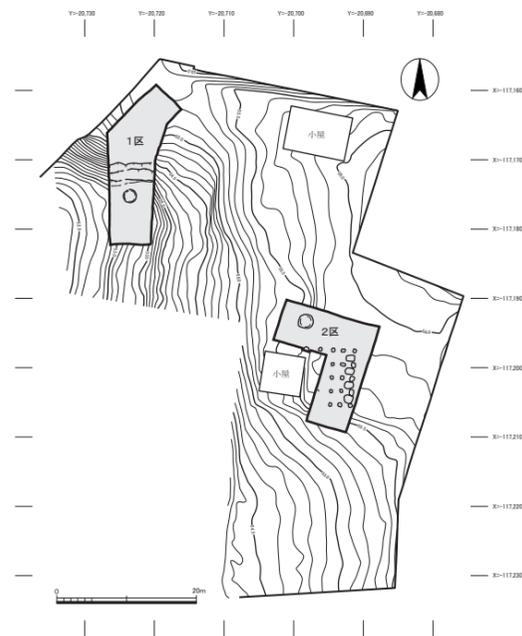


図6 地形測量図および調査区配置図（1：1,000）



図7 1区全景（南東から）



図8 1区瓦列10（南東から）

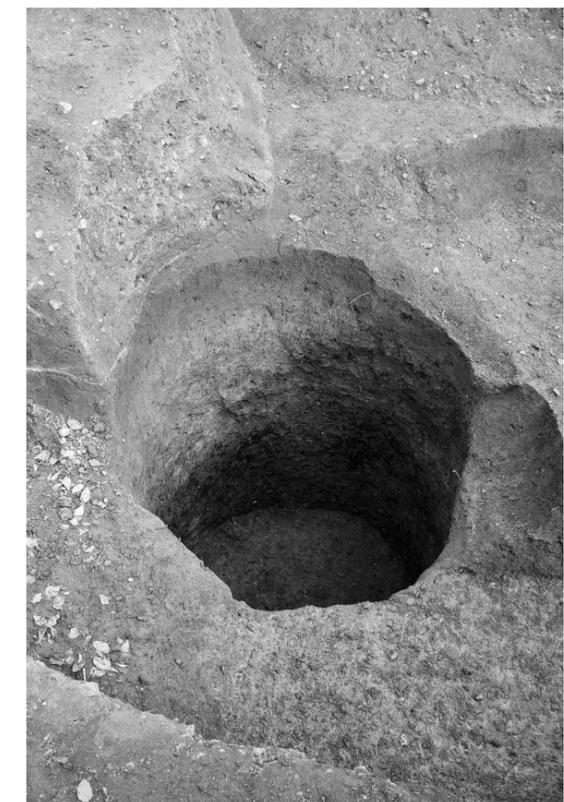


図9 1区井戸2

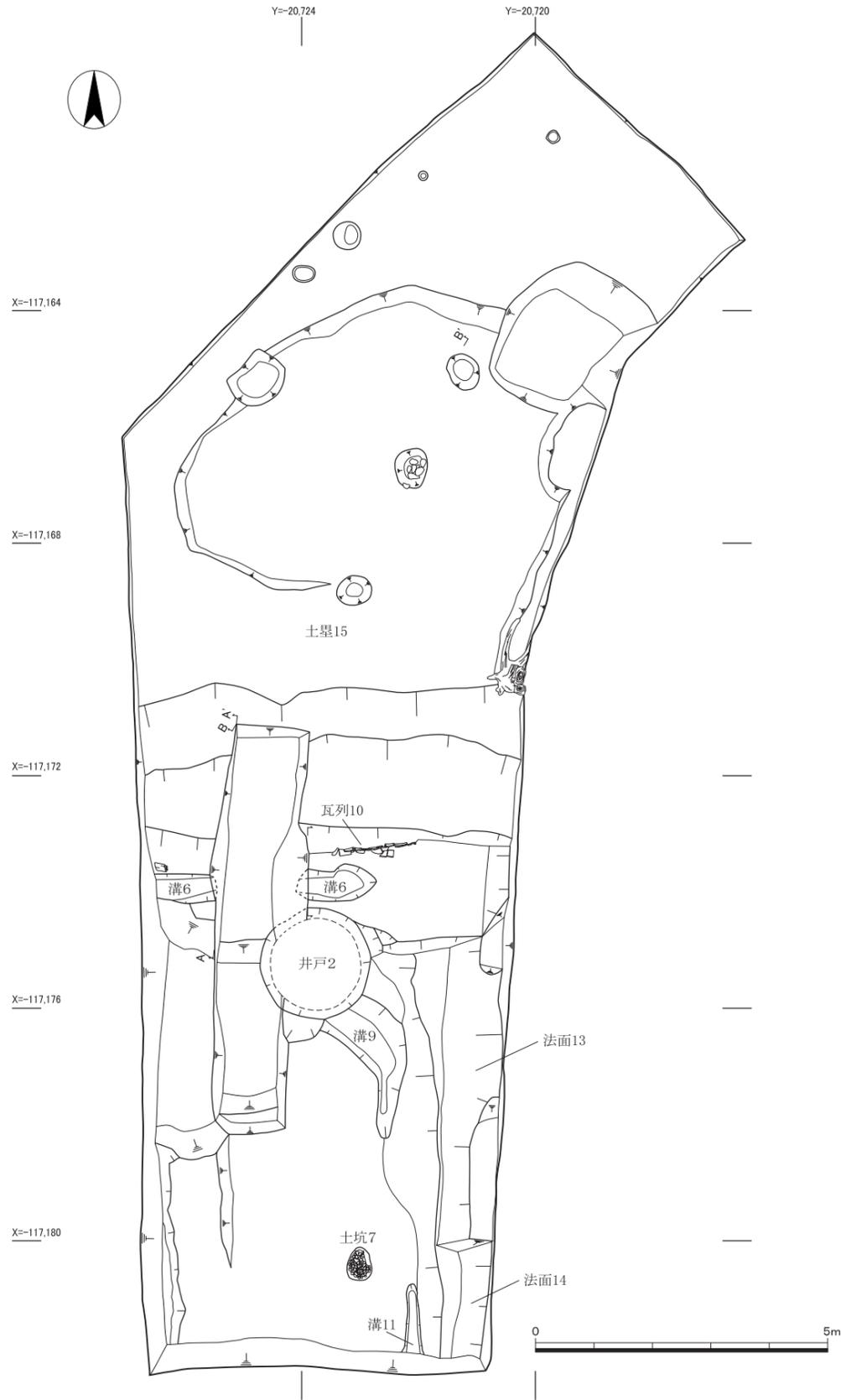


図10 1区遺構平面図 (1:100)

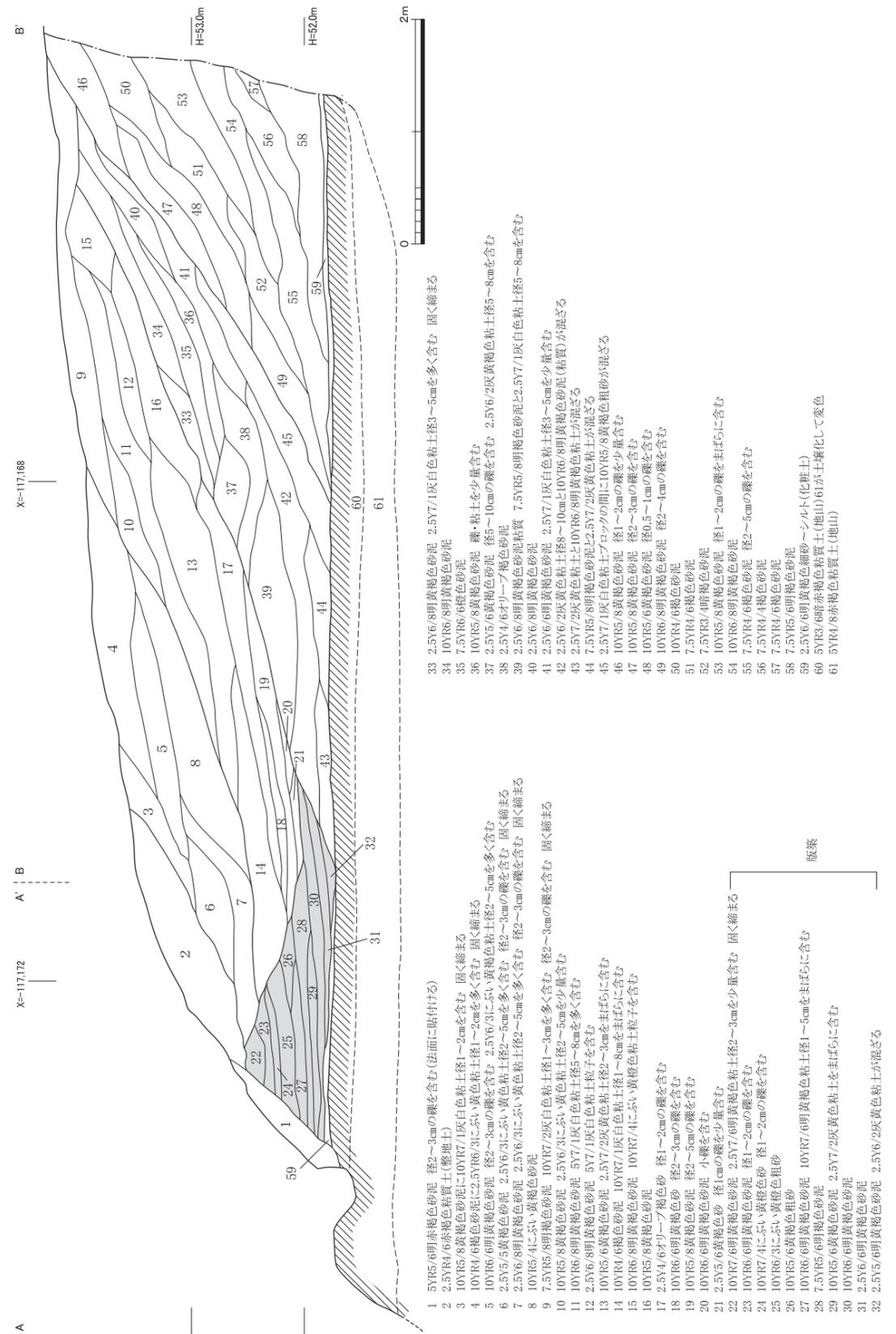


図11 1区土壘15断面図 (1:50)

2区の遺構

2区では、礎石建総柱建物や、建物の一部と考えられる南北柱穴列、井戸などを検出しました。

建物1 調査区中央部で柱穴を18基検出しました。復元すると南北4間東西4間以上の総柱建物となります。柱間は南北間が1.97mの等間隔です。東西間の柱間は西側2間分は1.97m間隔、東側2間分は1.45m間隔。この建物は京間の1間（6尺5寸=1.97m）が意識されていることがわかります。すべての柱穴は、径5～8cmの礫と粘質の土を交互に締め固めた壺掘り地業という工法をとっています。堅牢に造営された大型の礎石建物であったと考えます。

柱穴列76 調査区東部で、径約1.0mの隅丸方形の柱穴が南北に4基並びます。この柱穴には礫と砂泥が交互に詰め込まれ、やはり壺掘り地業という工法をとっていました。各柱穴の間隔は2m前後で、やはり京間の1間です。調査区内では対となる遺構はみつきませんでしたので、東側（調査区外）へ展開する建物と考えられます。この柱穴列76と建物1は重複しているため、時期差があることがわかりますが、相互に切り合う箇所がなかったこと、時期を判定できる遺物が少ないことから、建物の新旧関係はわかりませんでした。

井戸75 建物1の北側で検出しました。径約2.0mの素掘りの井戸です。検出面から深さ1.9mまで掘り下げましたが底面まで到達せず、作業の安全対策上、掘り下げを止めました。

整地層 遺構面をよくみると、赤褐色粘質土に、約14m（7間）の間隔で、灰黄色の粗砂層が幅約0.7mで帯状、また十字状に現れます。断面を観察すると、その粗砂層は約45度の傾斜角で粘質土の間に挟み込まれていました。粘質土との間に粗砂層を設けることで、水分を逃したり、土滑りを防ぐ効果があると考えられます。また、この層が工程の単位または作業の単位なども兼ねている可能性もあります。

北側の断ち割り断面に見える整地層でも固く締まった層に一定の単位で粗砂層を挟み込み、水抜きと土滑りに備えていました。また造成は東から西へ段階的に行っていました。造成単位の先端では固く締めた土で約45度の傾斜面を形成し、その下層には掘り込み地業を行い、積み上げた土を安定させる土留めとして機能させています。西へ西へと次の単位の整地土を積み上げて敷地全体の斜面をひな壇造成したと考えられます。

以上のように、土塁の裾部の版築工法による土手の作事、ひな壇先端部の掘り込み地業、整地の様子、建物の壺掘り地業といった土木工事のさまざまな工夫がなされていることがわかりました。



図12 2区全景（北東から）

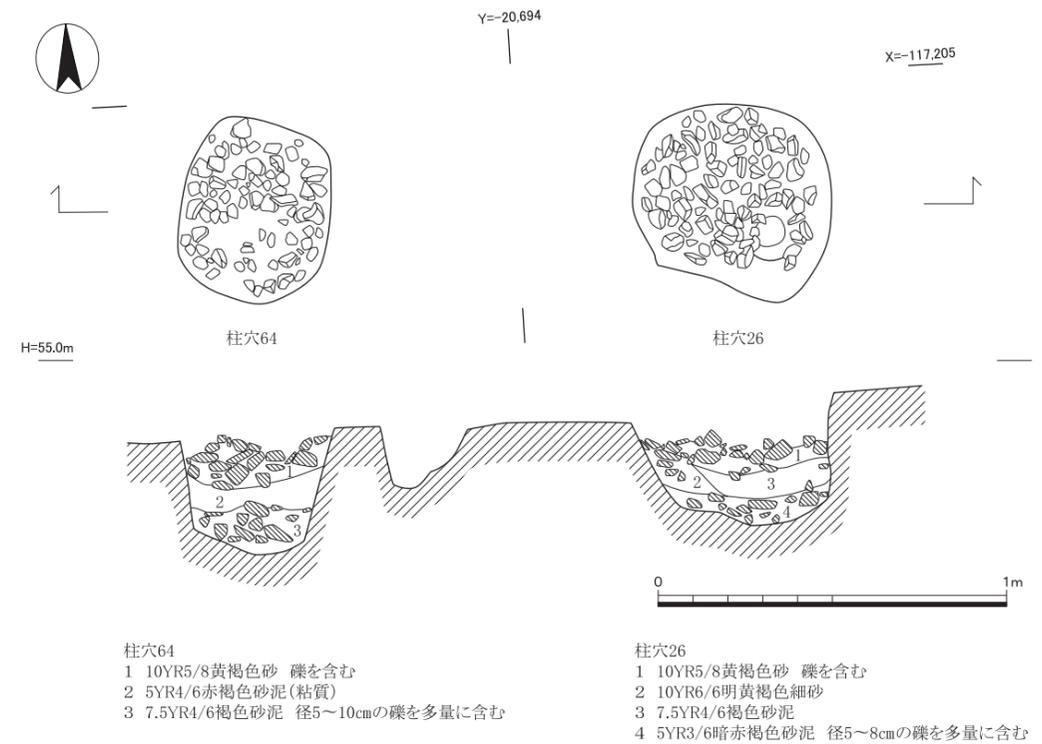


図13 2区建物1柱穴26・64実測図（1：20）

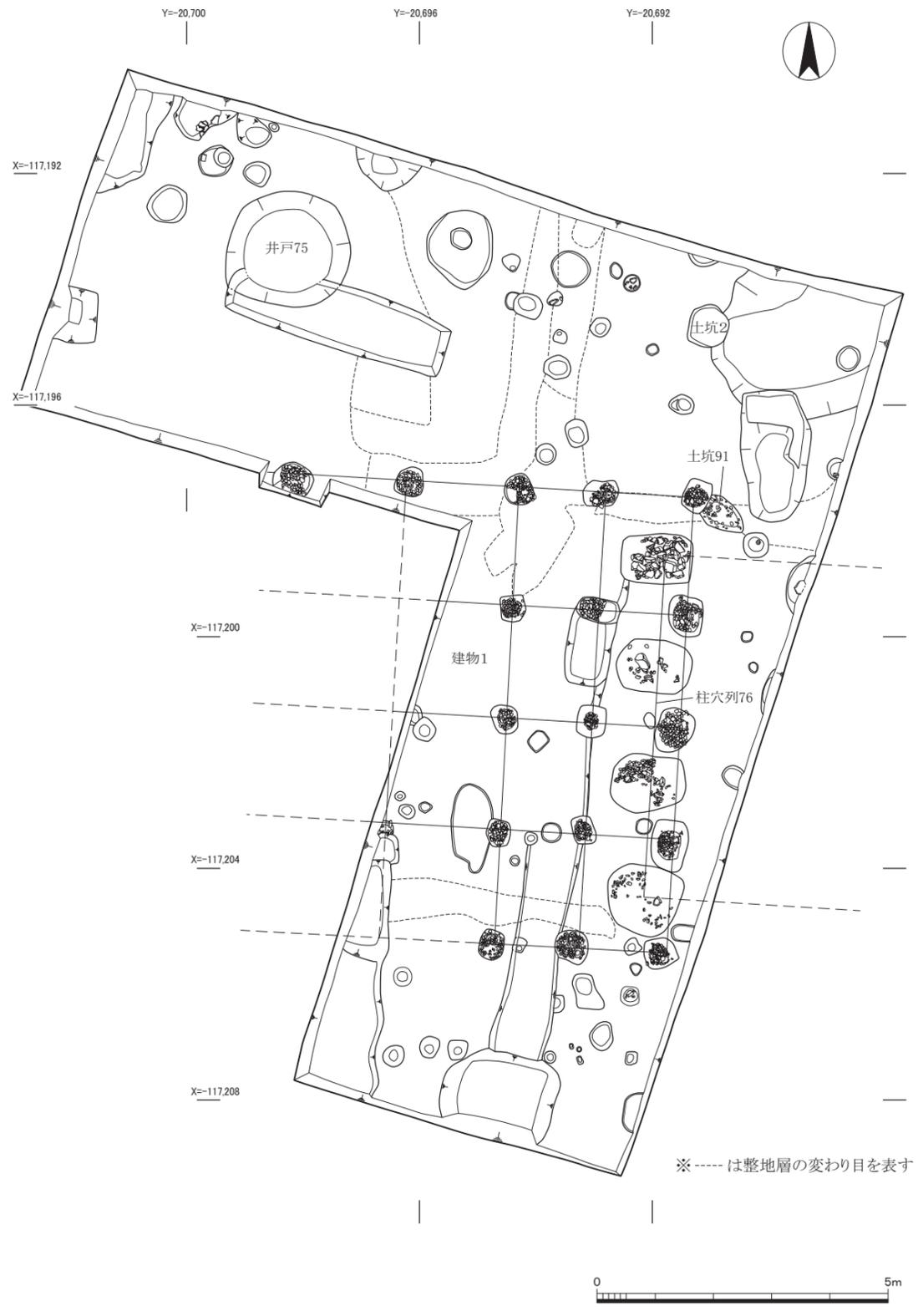


図14 2区遺構平面図(1:1)

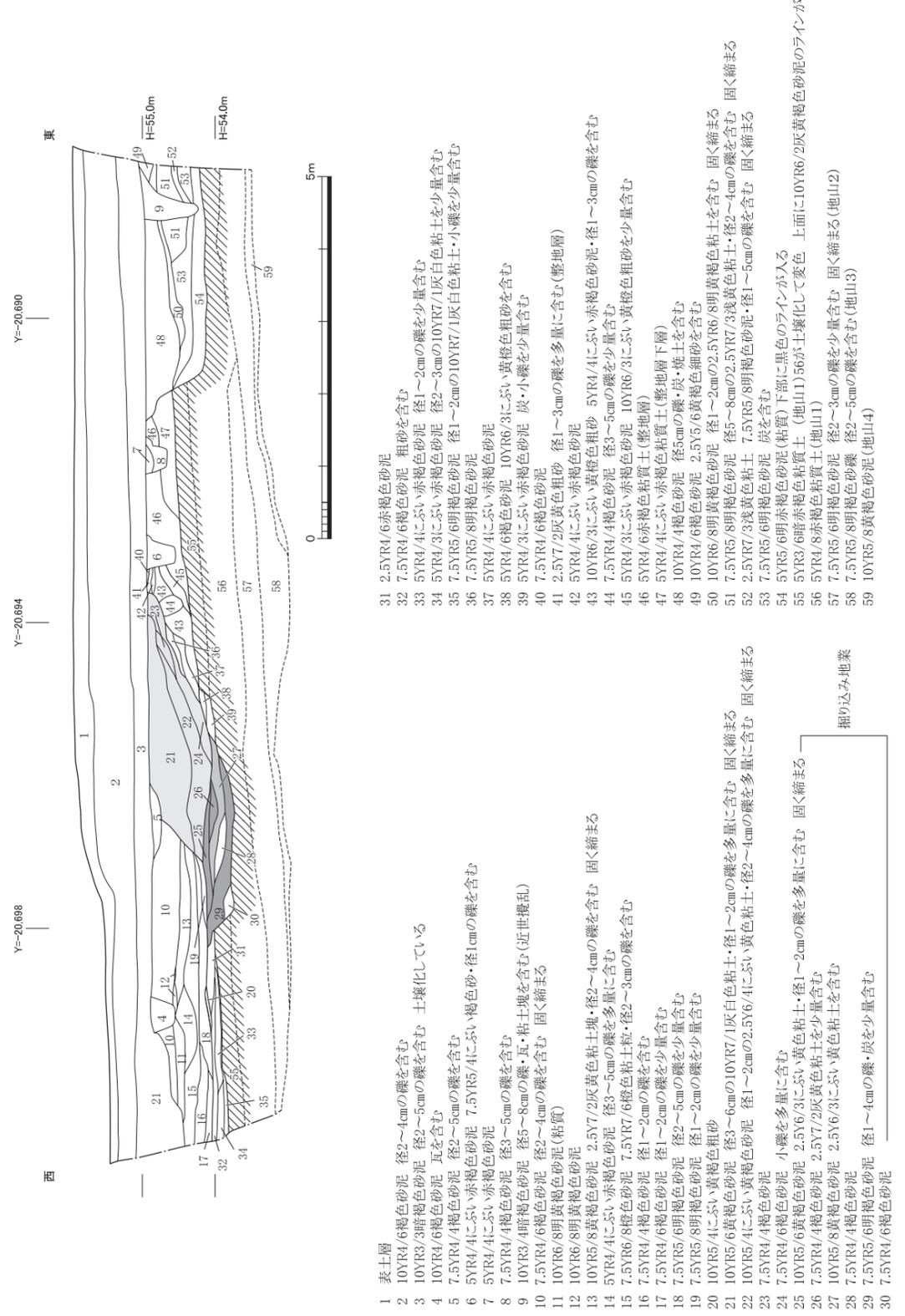


図15 2区北壁断面図(1:80)

- | | |
|---|---|
| <p>1 表土層</p> <p>2 10YR4/6褐色砂泥 径2~4cmの礫を含む</p> <p>3 10YR3/3暗褐色砂泥 径2~5cmの礫を含む 土壌化している</p> <p>4 10YR4/6褐色砂泥 瓦を含む</p> <p>5 7.5YR4/4褐色砂泥 径2~5cmの礫を含む</p> <p>6 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 7.5YR5/4にぶい褐色砂・径1cmの礫を含む</p> <p>7 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥</p> <p>8 7.5YR4/4褐色砂泥 径3~5cmの礫を含む</p> <p>9 10YR3/4暗褐色砂泥 径5~8cmの礫・瓦・粘土塊を含む(近世攪乱)</p> <p>10 7.5YR4/6褐色砂泥 径2~4cmの礫を含む 固く締まる</p> <p>11 10YR6/8明黄褐色砂泥(粘質)</p> <p>12 10YR6/8明黄褐色砂泥</p> <p>13 10YR5/8黄褐色砂泥 2.5Y7/2灰黄色粘土塊・径2~4cmの礫を含む 固く締まる</p> <p>14 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 径3~5cmの礫を多量に含む</p> <p>15 7.5YR6/8褐色砂泥 7.5YR7/6橙褐色粘土粒・径2~3cmの礫を含む</p> <p>16 7.5YR4/4褐色砂泥 径1~2cmの礫を含む</p> <p>17 7.5YR4/6褐色砂泥 径1~2cmの礫を少量含む</p> <p>18 7.5YR5/6明褐色砂泥 径2~5cmの礫を少量含む</p> <p>19 7.5YR5/8明褐色砂泥 径1~2cmの礫を少量含む</p> <p>20 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂</p> <p>21 10YR5/6黄褐色砂泥 径3~6cmの10YR7/1灰白色粘土・径1~2cmの礫を多量に含む 固く締まる</p> <p>22 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 径1~2cmの2.5Y6/4にぶい黄色粘土・径2~4cmの礫を多量に含む 固く締まる</p> <p>23 7.5YR4/4褐色砂泥</p> <p>24 7.5YR4/6褐色砂泥 小礫を多量に含む</p> <p>25 10YR5/6黄褐色砂泥 2.5Y6/3にぶい黄色粘土・径1~2cmの礫を多量に含む 固く締まる</p> <p>26 7.5YR4/4褐色砂泥 2.5Y7/2灰黄色粘土を少量含む</p> <p>27 10YR5/8黄褐色砂泥 2.5Y6/3にぶい黄色粘土を含む</p> <p>28 7.5YR4/4褐色砂泥</p> <p>29 7.5YR5/6明褐色砂泥 径1~4cmの礫・炭を少量含む</p> <p>30 7.5YR4/6褐色砂泥</p> | <p>31 2.5YR4/6赤褐色砂泥</p> <p>32 7.5YR4/6褐色砂泥 粗砂を含む</p> <p>33 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 径1~2cmの礫を少量含む</p> <p>34 5YR4/3にぶい赤褐色砂泥 径2~3cmの10YR7/1灰白色粘土を少量含む</p> <p>35 7.5YR5/6明褐色砂泥 径1~2cmの10YR7/1灰白色粘土・小礫を少量含む</p> <p>36 7.5YR5/8明褐色砂泥</p> <p>37 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥</p> <p>38 5YR4/6褐色砂泥 10YR6/3にぶい黄褐色粗砂を含む</p> <p>39 5YR4/3にぶい赤褐色砂泥 炭・小礫を少量含む</p> <p>40 7.5YR4/6褐色砂泥</p> <p>41 2.5Y7/2灰黄色粗砂 径1~3cmの礫を多量に含む(整地層)</p> <p>42 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥</p> <p>43 10YR6/3にぶい黄褐色粗砂 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥・径1~3cmの礫を含む</p> <p>44 7.5YR4/4褐色砂泥 径3~5cmの礫を少量含む</p> <p>45 5YR4/3にぶい赤褐色砂泥 10YR6/3にぶい黄褐色粗砂を少量含む</p> <p>46 5YR4/6赤褐色粘質土(整地層)</p> <p>47 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土(整地層下層)</p> <p>48 10YR4/4褐色砂泥 径5cmの礫・炭・焼土を含む</p> <p>49 10YR4/6褐色砂泥 2.5Y5/6黄褐色細砂を含む</p> <p>50 10YR6/8明黄褐色砂泥 径1~2cmの2.5YR6/8明黄褐色粘土を含む 固く締まる</p> <p>51 7.5YR5/6明褐色砂泥 径5~8cmの2.5YR7/3浅黄色粘土・径2~4cmの礫を含む 固く締まる</p> <p>52 2.5YR7/3浅黄色粘土 7.5YR5/8明褐色砂泥・径1~5cmの礫を含む 固く締まる</p> <p>53 7.5YR5/6明褐色砂泥 炭を含む</p> <p>54 5YR5/6明赤褐色粘質土(粘質)下部に黒色のラインが入る</p> <p>55 10YR3/6暗赤褐色粘質土(地山1)56が土壌化して変色 上面に10YR6/2灰黄褐色砂泥のラインが入る</p> <p>56 5YR4/8赤褐色粘質土(地山1)</p> <p>57 7.5YR5/6明褐色砂泥 径2~3cmの礫を少量含む 固く締まる(地山2)</p> <p>58 7.5YR5/6明褐色砂泥 径2~5cmの礫を含む(地山3)</p> <p>59 10YR5/8黄褐色砂泥(地山4)</p> |
|---|---|



図16 出土瓦

出土遺物

各遺構から出土した土器類は、すべて安土桃山時代末期から江戸時代初期に属するものでした。少なくとも伏見城廃城の前後にはこの遺構も廃絶していることを現わしています。

瓦に関しては、巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦のほかに鳥文軒丸瓦や竹の葉文軒平瓦が出土、中には金箔を施すもの、金箔の下地である漆の残っているものもありました。鳥や竹の文様は伊達家の家紋「竹に雀」を想起させるものがあります。しかしながら、仙台城や伊達江戸屋敷の発掘調査では、家紋瓦として「三引両文」「九曜文」は報告されていますが「竹に雀文」はありません。これは今後の検討課題です。

試みに、出土した鳥文軒丸瓦と竹の葉文軒平瓦を葺き上げた状態に合成復元してみると、向かいあう鳥に竹の葉と筍の文様が見えてきます。伊達家の複雑な家紋「竹に雀」を簡略化して表現したようにも見えませんか。この文様の軒瓦には金箔の残存するものがあります。伊達家上屋敷の建物の一端を示す象徴的な遺物ではないでしょうか。



図17 竹に雀文



図18 軒瓦葺き上げ状態復元（試案）

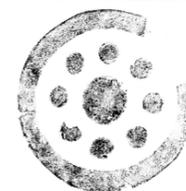
おわりに

調査対象地は、元和9年（1623）の伏見城廃城以降、大きな開発に遭うこともなく、耕作土で覆われることによって、伏見城期の遺構が非常に良好な状態で残存していました。今回の調査で、桃山丘陵西斜面における伏見城期の整地状況、伏見城惣構えの構築状況、伊達家に関わるとみられる建物遺構の状況などを明確にするという大きな成果があったことを報告いたします。

<参考>



九曜文



仙台城本丸跡出土



三引両文



仙台城本丸跡出土